

大学で社会福祉を学ぶ、その動機について

Masako Nitta

人文学部准教授 新田 雅子

人間科学科で福祉領域を担当している立場上、推薦入試やAO入試の面接場面で、志望動機に「福祉が学べる」ということを挙げる生徒さんの話を聞くことが多い。自分自身が生きづらさを抱えて周囲の人に支えられてきた経験や、ご家族に障がいを持つ人があって、その人との関わりから福祉について勉強したいと思うようになったというようなことがしばしば語られる。誠実で納得ゆく進学動機だと思う。しかしそうでない場合、つまり自分自身や身近な人に福祉的支援が必要な事態が生じて、そういうことについて学びたいと考え始めたというような背景のない生徒さんは、なぜ大学で福祉を勉強したいと思ったかについて、必ずしも説得力ある説明ができないというきらいがある。そうした傾向は入学後も引き続くことがあり、福祉実習の前年に面談で実習志望動機を聞くのだが、「人に喜ばれる仕事がしたいから」「人とかかわるのが好きだから」などと言う学生に、すぐさま私は「美味しいお菓子を作るのも人に喜ばれる仕事だし、デパートの店員だって人とかかわる仕事だよ」と意地悪な突っ込みを入れてしまう。本稿は、私にそう言われてしゅんとなった学生と、大学で社会福祉を学び、福祉の現場に身を置きたいと思うようになったのはなぜかを一緒に言葉にしてみる場面を想定し、以下紙幅の許す限り述べてみたい。

たとえば「福祉の人」をイメージした時、一般的に思い描かれる像は、杖をつくお年寄りの手を引いて優しくに語りかける人、だろうか。確かに、困っている人に優しくできる人や誰かが孤立している時に暖かい言葉をかけることができる人、そういう人になりたいという希望は、「福祉の人」を目指す動機にはなるかもしれない。しかしそれはあくまでも一般的な話であって、暖かく優しい人になることと社会福祉を学ぶこ



2011年12月24日に行われた実習報告会。終わってホッとしている実習生たち

とは別のことである。なぜなら、社会福祉を学んでいなくとも、困っている人に優しくできる人はたくさんいるからだ。だから、「優しさ」は無敵大切だけれど、直接的な動機や目標にはならない。

「優しさ」よりも強い動機となりうるのが、「正しさ」の希求である。虐待や貧困、偏見や排除といった、社会の中にある問題を放置できない気持ちは、大学で社会福祉を学んだり、福祉の現場で働くことを志す理由として説得力をもつ。社会福祉とは、ある個人や集団の身の上で正義や尊厳が損なわれた状態において発動する実践だからである。同じ人間なのになぜこのような扱いを受けるのか、何も悪いことはしていないのになぜこんな目にあうのか、私たちの生きている社会はこんなことすら解決できないのか、そのなかでいったい私は何をしているのか——こうした憤怒が社会と自己に対する問題意識に接続するとき、「正しさ」を求めて私たちは社会福祉の学びや実践に引きつけられていくのではないかと思う。

さて、私がここで「正しさ」をかぎカッコ付きで記載したのは理由がある（「優しさ」についても同様だが）。「正しさ」を少し考えてみれば誰もが感じるように、誰かにとっての「正しさ」は、私にとっての「正しさ」と違っているかもしれないのである。上述した

ように社会福祉は、正義や尊厳が奪われ個人で解決できないような状況に陥った人や集団にアプローチするわけだから、倫理が何よりも求められる分野である。しかし同時に、多様な見方や考え方、生き方と向きあい受け容れることが求められる世界でもある。このあたりに社会福祉の面白さがあると私は思うのだが、一番難しいところでもあるので、私自身が出会った事例を紹介して少し詳しく述べてみたい。

東京屈指の繁華街、池袋の保健センターの会議でだいぶ前に拳がっていたご夫婦である。お二人とも80代で、ご主人は反社会的組織の構成員だった経歴があり、人生の半分を塙の中で過ごしてきたような方だった。無保険・無年金のため、生活保護で暮らしている。奥さんは内縁の妻で、長らくいわゆる風俗の世界で生きてこられたようだった。とはいえいずれも詳しい経歴はわからない。このご夫婦について、近所の民生委員から保健センターに「夫が庭先で妻を素っ裸にして、ホースで頭から水をかけている。虐待のおそれがあるから見てやってほしい」との通報が入ったところから、介入が始まった。

古い平屋の借家の中は足を踏み入れるのを躊躇するほどゴミが散乱し、エアコンは無く、異臭が漂っていた。ずいぶん前から認知症を発症していたらしい奥さんはほぼ寝たきりで、敷きっぱなしの蒲団に垂れ流しの状態で昼夜を過ごしていたようだ。保健師はしぶるご主人をなんとか説得し、ほとんど言葉を発しない奥さんの「検査」という名目で近くの施設に緊急入所の措置をとった。恐らく何年かぶりに入浴し、温かい食事をもって清潔な布団で眠った奥さんに、翌朝保健師は「〇〇さん、よく眠れましたか」と声をかけた。するとそれまで話すことのなかった奥さんが顔を上げ、一言「うちに帰りたいです」とはっきり言って、保健師を絶句させたという。

この奥さんの言う「うち」が何を指すのか、また、このご夫婦が果たしてその後どうなったのか、私は知らない。ただ、ご主人が「差し入れ」にコンビニのおにぎりを持って毎日のように面会に来ているという後日談は記憶に残っている。この奥さんにとって、保健師や施設職員の優しい言葉よりも、私たちには決して想像しきれない長い時間と経験を共にしてきたご主人の、不器用な、時には常識外れともいえるケアが、何より安息をもたらすということだけは事実だった。

状況だけ見れば、認知症の妻に対する夫の「虐待事例」である。とりあえず夫婦を引き離して生命の安全を確保し生活再建のきっかけを作った保健師の実践は「正しい」ものであるかもしれない。しかし当の夫婦にとってみれば、保健福祉の専門家たちは優しくも正し

くもない、はた迷惑な^{ちんにゆうしや}闖入者たちに違いないのである。

そうは言っても奥さんの言う通り「うち」にこのまま帰すわけにもいかないから、職員たちは夫婦それぞれの心身の状態や経済状況をあらためて詳しく把握し、家族や地域の情報を集めたり活用できる制度や資源を調べたりしながら、夫婦双方にとって最善の方針を提案し支援していくことになる。これがまさにソーシャルワークの具体的な中身にあたる部分なのだが、支援が本人にとって不本意なものであったり的外れだったりすると、どんなにそれが教科書的に「正しい」ものであったとしてもその人にとっては意味をなさないということがある。だから、支援する側は自らの見方や考え方を相対化し（一旦棚上げして）、相手の見方や考え方を引き出したり汲み取ったりできるよう、常に謙虚に向き合う必要がある。

たったいま「教科書的」という表現をしたが、上で述べたようなことは社会福祉の実践において基本的な考え方であり、平たく言えば、ちゃんとした社会福祉の「教科書」には「教科書通りにはいかない」ということが書いてあるのである。福祉の現場のリアリティに触れるたび、同じ顔の人間がいないように、人びとの生活問題はひとつとして同じものはないということ、そしてその人がどう生きていくかを決められるのはその人自身以外にいないということ、そんな当たり前のことを痛感する。

ここで話をもとに戻そう。社会福祉を大学で学ぶというとき、「優しさ」へのあこがれや、不条理や不正義への疑問や憤りを根源とする「正しさ」の希求のほか、何がスタートラインとなりうるだろうか。それはたぶん、人間という存在への健全な好奇心である。自分と異なる世代で、全く異質なライフスタイルの人びとに対峙して、かれらがこれまでどんなふう生きてきて、いま何を見、何を思うのかを慮り、これからどう生きていくかを共に考えるなどということ、人間への尽きない興味や想像力無くしていったい誰ができるだろう。人間の善さもずるさも、たくましさも脆さも喜びも悲しみも全部ひっくるめて、人間という存在の真の姿に近づきたいという気持ちが、大学で社会福祉を学ぶということやそういう仕事をしたいという思いにつながっていくのではないかと私は思う。

こんなふううまいこと自分で説明はできなくても、きっとそうなんだろうと思える学生が少なくないことを、本学で社会福祉の講義をしていて実感する。そしてそういう学生が大学で、希望を見出す智恵や仲間を作る力を身につけ、問題から逃げずに向きあう実践者になっていくことを願いながら、私も日々かれらと向きあっている。

学科紹介 人間科学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/ningen/>

学科の特徴

人間科学科は、「社会」「福祉」「心理・教育」「文化」「思想」の5つの学問領域からなっており、それらの協同によって人間とその社会の諸問題にたいする多様な視点からの探求を目的としています。

「社会」は社会学の立場から家族・生活・労働などの視点で、現代の地域社会の問題を考察する領域です。

「福祉」は社会にあるさまざまな生活の困難を課題として考察します。「心理・教育」は人間の生涯発達を心理学と教育学の視点から探求する領域で、「文化」は歴史学、考古学、民俗学の立場から北海道を中心とした北方地域の生活文化を研究します。そして「思想」は哲学、思想、文学の領域から人間観や社会思想、生命や環境について考察します。

学科の特徴的な講義・授業など

新入生は5領域いずれかの基礎ゼミナールに所属して、大学での学びの基礎を身に付けると同時に、一方では領域にしばられることなく広く自由に学んで、自分の興味の方向性や可能性を探ります。その後2年生の後期に、専門的に学ぶ領域を決定し、担当教員を選んで登録します（3年次から所属する専門ゼミナールの決定）。人間探求の幅広い学問を自由に学びながら、教養を深めつつ、1年半をかけて専門領域を絞って同時に専門性を高めていきます。それが第1の特徴です。

3年生からは発表と議論を主体とした少人数の専門ゼミナールで学び、その成果を踏まえて4年生で「卒業論文」をまとめます。専門ゼミと卒業論文の作成を通して、自らテーマを設定し、調査・研究し、文章化し、そして発表する能力を育成する、これが第2の特徴です。多くの学生が大学4年間でもっとも勉強したと実感する部分です。卒業論文発表会は学生と教員を前にして発表10分、質疑5分の持ち時間で行われます。近々学科のホームページに、11年度の卒業論文タイトル一覧をのせますので、是非ご覧下さい。

5領域すべてに実験・実習科目が置かれています。学生自らが頭と体を動かして現実から学ぶことを重視しているからです。「心理学実験実習」「社会福祉実習」「社会調査」「考古学実習」などが「調査法」や「研究法」とともに設置されています。実験・実習科目が充実している点が、



私が作った
土器です

第3の特徴です。

教員を目指す人は「教職課程」の所定の単位を修得することで、「特別支援学校教員免許」、中学「社会」、高校「地歴」「公民」「福祉」の免許を取得することができます。また「社会福祉士」「精神保健福祉士」の国家試験受験資格、「学芸員」「社会教育主事」「社会福祉主事」「認定心理士」の資格取得も可能です。資格課程が充実していること、これが第4の特徴です。



今年は141人が卒論
発表会に臨みます

就職・進路など

大学全体の傾向でもありますが、卸・小売業が多く、次いでサービス業が続きます。サービス業の中には医療・福祉関係が含まれていることもあって、2011年度実績（2012年2月現在）では本学科生の占める割合は本学中最多となっております。また市町村事務、警察官にも毎年コンスタントに合格者を出していますし、教員や社会教育主事、学芸員などの資格を生かした就職もあり、学科の特性を反映してその進路は多岐にわたっています。

資格を生かした就職の可能性に関する質問をよく受けますので、少し触れておきます。たとえば博物館の職員である学芸員では、何よりも、各博物館が求める「専門性」が問われます。歴史学や民俗学、考古学、地質学、動物学、植物学など、どのような専門をもった学芸員資格者であるかです。また、それによって就職率は全く異なります。決して資格があれば就職できるというものではありません。「専門性」は学芸員に限らずどの分野でも要求される資質ですし、同時に社会は「広い視野」「豊かな人間性」をもった人材を求めていることをしっかりと受けとめなければなりません。

4年間漠然と学ぶのではなく、しっかりと進路を見定め、計画的な科目選択や領域の選定とあわせて資格取得を考える必要があるのです。

学科紹介 英語英米文学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~eigoeibei/index.html>

学科の特徴

英文科のようなものは文系大学ならどの大学にもあります。どこも英語能力の向上を目標とし、留学制度などを備えています。

しかしよく見れば英文科にもかなりの違いがあります。本学の英語英米文学科は、流行に流されない真の



English Camp

生きる力を養成するという点に特徴があります。第一に、到達度レベル別に丁寧な英語教育をしています。努力した人が

ぐんぐん伸びる環境を備えています。第二に、英語に留まらない幅広い講義を提供しています。文学、文化、言語学、異文化コミュニケーションを柱に、情報を読み解く力、分析する力、他人に伝え説得する力を養成します。これはいわゆる社会人基礎力と共通するものです。第三に、教員の熱意が違います。教員は学生の成長を助けるため、親身になって対応します。講義ノートの読みっぱなしという教員は存在しません。

社会に出てから役立つ能力——情報収集力、判断力、批判精神、説得技術——を身につけたい人に、私たちは英語を通じてアプローチしていきます。

学科の特徴的な講義・授業など

札幌学院大学には、学生の興味を引きつける講義がたくさんあります。その中でも、アメリカ史の講義を取り上げてみたいと思います。この講義は、これまでの歴史の授業とは違います。高校や中学校で歴史といえば、年号や出来事を暗記するというのがそのメインだと思います。しかしこの講義では、事物の起こった理由、そしてそれらの背景などを様々な角度から見て、意見を交換しあいます。この講義は決して簡単ではありません。しかし今ではこの講義を通し、それまで一つの角度から見てきた物事をいろいろな角度から見るができるようになったと実感しています。そしてこのように私が成長できたのは先生の手厚いサポートのお陰です。

「求めれば、求めるだけ先生はサポートしてくれ

る。」これが、札幌学院大学の最大の魅力です。自分次第で私たちは、色々なことに挑戦することができます。皆さんがこのような貴重な経験ができ、充実した大学生活となりますように。

(英語英文学科 2 年 鈴木 春香、黒川恵里子)

就職・進路など

英語英米文学科では、英語技能を生かした就職をする人と、コミュニケーション能力を生かした就職をする人がいます。

英語を生かした就職先としては教員や旅行・ホテル関連などがあり、毎年就職実績が伸びています。特に教員をめざす人にとって、中学高校の英語科教員だけでなく小学校教員免許も取れることは、大きな励みになっています。

コミュニケーション能力を生かした就職としては、営業、販売、企画などがあります。札幌圏ではこのような求人が圧倒的に多いこともあり、多くの卒業生を輩出しています。日々の業務の中で発生する様々な出来事に柔軟に対応できる社会人基礎力を備えた本学科卒業生は、入社してから大きく伸びると企業から歓迎されています。また最近では地方公務員としての道を選ぶ人も増えています。特に外国人の訪問・移住が多い後志地区では、英語を使える公務員のニーズが高まっています。

卒業後、留学やワーキングホリデーの経験を積み、就職に生かす人が多いのも、本学科の特徴です。就職統計には反映されない卒業生ですが、実際にオーストラリアやアメリカで活躍している人もいます。

あまり知られていませんが、本学のキャリア支援課は就職活動を行う学生を強力に支援しています。十分に活用してください。



交流プログラム

学科紹介 臨床心理学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~rinshoshinri/index.html>

学科の特徴

臨床心理学について、カウンセリングや精神分析、心理テストといったものをイメージされる方が多いのではないかと思います。もちろんこれらの方法は臨床心理学の中核的な部分をなすものですが、その基礎に、人のものの感じ方や行動について心理学理論があることを

忘れてはなりません。臨床心理学は、さまざまな心理学理論を応用して、こころの働きについて探究する学問です。また、それらの知見を活かして、こころの健康を保つための援助をしていくことにも特徴があります。

本学の臨床心理学科では、こころの働きを理解する上で基礎的な心理学の知識から、心理療法の理論、実践的な技法を身につけるための実習まで、幅広い講義科目が体系的に配置されています。特に実習科目は充実しており、心理臨床現場で用いられる技法について、実際に目にしたり、経験したりすることで、体験的に

身につけてもらうことに力を入れています。

また、こころ健康を保つための援助のなかでは、臨床心理学だけでなく、心理学の他の領域や他の学問領域の知識も必要とされます。例えば、子どものこころの問題について理解・対応するには、子どもの心身の発達を扱う発達心理学や、子どもを取り巻く家族を扱う家族心理学などの知識が必須となります。生きている意味や、生きがいの喪失に苦しむ人と向かい合うためには、哲学的な素養も必要になるでしょう。児童虐待の問題を考えるためには、トラウマ（こころの傷）がもたらす心理的影響とともに、そのような問題が急増する現代社会についても知る必要があります。本学科では、臨床心理学を中心にしつつ、こころの問題を広い視野から理解するための学びを提供しています。そしてその学びの上に、精神保健福祉士の養成、さらには臨床心理士資格認定協会第一種指定校である大学院（臨床心理学研究科）における臨床心理士の養成を行っています。

学科の特徴的な講義・授業など

本学科では、先ほど述べたように、幅広い学びの機会を提供するため、様々な講義、実習科目が体系的に配置されています。初めの2年間は、「心理学研究法A、B」において心理学の代表的な研究とその方法を、「臨床心理学概論A、B」では臨床心理学という学問領域の概観を学習します。これらの基礎的知識を踏まえつつ、2年次からは「心理療法A、B」「心理アセスメント」など、臨床心理学の専門的な領域について学び始めます。さらに3年次からの「臨床心理学演習」では、少人数で構成されるゼミナールで各教員の専門領域について深く学びます。この科目は専門教育の中心となる科目で、専門家としての教員からさまざまな刺激を受けることで、人間的にも成長する機会となっています。また、さらに学びを深めたい学生は、専門文献をより深く読み込む「講読演習」を履修したり、自分のテーマについて研究しひとつの論文を執筆する「卒業論文」を履修していきます。



応用実習Cの授業風景

学科の学生活動

臨床心理学科に入学して、1、2年生の時には、心理学の基礎的な知識や研究法をしっかりと学ぶことができました。カウンセリングのロールプレイや心理検

査について実際に体験しながら学べたのも楽しかったです。また私の場合は、他学科の講義も含め、心理学領域に幅広く



写真中央が伊藤杏菜さん

触れたことが、自分の視野を広げることに繋がったと感じています。深く学びたい人には、少人数の「教養ゼミナール」で心理学検定取得を目指しながら、心理学全般をコツコツと学んでいくのも、おすすめです。

3年生以降は、より専門的な実習が多くなります。特に、私が面白かったのは「応用実習」です。「応用実習B」は、芸術療法として箱庭や描画、コラージュなどの表現に触れたり、ダンスセラピーで普段あまり意識していない身体の感じを体験したり、気づかされることの多い講義です。また、「応用実習C」では、学外の施設見学や実習を通して、社会の中での自分を見つめ直し、将来の方向性を明確に定めていくことができました。私の場合は、児童養護施設での実習をきっかけにボランティア活動に従事したり、エクステンションセンターの保育士資格受験のための講座を利用したりしながら、子どもに関する専門知識を深めることができました。将来は子どもに関わる心理職に就きたいと考えています。

そのほか、アルバイトすることもよい経験となります。接客などを通して、お客さんの年代や性別、人柄に合わせて柔軟に対応する力を身につけることができます。将来、心理職を考える上で、多くの人との関わりは経験豊かな自分へと成長するよい機会になると思います。

（臨床心理学科3年 伊藤 杏菜）

就職・進路など

臨床心理学科の卒業生の進路としては、近年は精神保健福祉士として病院や社会福祉施設に就職する学生が増えています。また、大学院臨床心理学研究科に進学してさらに高度な専門知識を獲得し、臨床心理士を目指す学生もいます。しかし、卒業生の進路は必ずしも心理学の専門的領域だけに限られている訳ではなく、多くの卒業生はサービス業や卸・小売業の分野の一般企業に就職しています。もちろん、どのような進路に進んだ場合にも、臨床心理学科で身につけた人間理解に対する深いまなざしと、援助に対する姿勢が評価されていることはいうまでもありません。特に人事部門などからは働きが期待されています。

学科紹介 こども発達学科

HPこ発の森 : <http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~child/>

学科の特徴

～子どもへの理解を深め、実践力を磨く～

子どもたちの豊かな心を育む手助けがしたい！ 教育の現場で子どもたちに教え、彼らの学びを支援したい！ …熱意はよくわかりますが、それを実際に意味のある働きかけとするには、学んでおくべきことがたくさんあるのですよ。こども発達学科では、子どもたちが、生育環境の中で何を学び、様々な能力がいかに関達するのかを、発達心理学や教育学をはじめとする多



数の領域から学び、子どもの成長・発達の不思議を読み解く知識を蓄えます。その一方で、実践的な教育や発達支援の方法について学び、子どもたちの「育ち

と「学び」をサポートする力を身につけます。体験的・実践的な学習を重視する独自のカリキュラムで、子どもの成長・発達への深い理解を持って、教育や保育などの実践に寄与しうる人材の育成をめざしています。

こども発達学科のカリキュラムには、子どもの発達・教育に関する科目が多数あり、自然・栄養・心理・コミュニケーション・社会・文化・福祉・芸術・コンピュータなど、さまざまな切り口で学ぶことができます。



小学校教科の指導法や特別支援教育など、教職に関わる科目が数多くあり、卒業と同時に小学校教諭1種免許状を取得することができます。教師を目指す学生には、教員による自主講座など、きめ細かな指導を受けられます。体験や実践に重点をおいた科目が多数



あり、実習では、子ども向けの学習行事を企画・実施するなど、実際に子どもたちとふれあう機会もあります。教職の科目では、模擬授業を積極的に行い、教育

現場で通用する実践的なスキルを養います。資格取得の機会も豊富にあり、小学校教諭を含めた複数の教員免許状、社会教育主事や学芸員の資格、認定心理士などが選択的に取得可能です。また、在学中の受験によって保育士の資格を取得する学生もいます。

就職・進路など～卒業生の多くが教師に～

こども発達学科の卒業生は、北海道や関東圏の小学校や特別支援学校の教員のほか、養護施設職員、保育所職員として、あるいは民間企業、社会福祉法人などに就職しています。就職の他、大学院などへの進学者もいます。1期生が卒業の2010年春、2期生が卒業の2011年春と2年連続で90%に達する高い就職率となっています。

教員採用試験では、現役合格が困難な中で4年次の受験で合格して、卒業と同時に北海道をはじめ全国各地の正規採用教員となった卒業生も。



2009年実施試験では7名(1期生受験)、2010年実施試験では7名(2期生受験)、そして、2011年実施試験では8名(3期生受験)が現役合格しました。期限付き教員を含めると、卒業時に教職へ就いた卒業生は、2010年春が38名(1期生)、2011年春(2期生)が29名にのぼり、本学科卒業生の主な進路となっています。

“こ発”で学びませんか？

子どもの成長・発達の面から人間理解を深めたいと思っている人も、教師になりたい！という具体的な目標を持っている人も、子どもの発達や教育について積極的に学ぶ意欲を持つ皆さんは、ぜひ、こども発達学科で学ぶことを考えてみてください。定員50名と小規模ですが、毎年、1年生全員が一つのクラスの様に仲良くまとまる楽しい雰囲気の学科です。本学科の学生たちは、学生も教員も顔見知りの授業でのびのびと自分の考えを述べあったり、グループでディスカッションをしたり、仲間とのよいライバル関係を通して互いに切磋琢磨して成長しています。学科独自のホームページ“こ発の森”では、本学科に関する皆さんの事柄を発信していますので、ぜひご覧ください。



新任教員自己紹介



教授 塩見 啓一
(人間科学科)

昨年3月までは、30数年間障害児の教育に関わっていました。学校、研修・相談機関、行政と渡り歩いていましたので、教師としては十数年ほどの経験しかありません。従って「障害児教育の専門家」と言われると、自分で首を傾げてしまいます。主に関わってきたのは今でいう知的障害（当時は精神薄弱でした）なので、余計に専門性には疑問が付きまといまいます。何しろ、知能とは何かという問いに適確に答えられる人はそう多くはないでしょうし、増してや、我が国では知能に「的」をつけて、知的障害というふうになってしまったので、いったいそれはどういうものなのかがよくわかりません。さらに最近になって発達障害という概念が肥大化してブームになっています。その上に「高機能」とか「広汎性」ということばが乗ると、もう何でもありの世界になって、まさに「知的」好奇心がくすぐられます。一生懸命学習しなければ、期待に応えられないと必死で勉強中です。



准教授 村澤和多里
(臨床心理学科)

2011年4月に臨床心理学科に着任しました。3月までいた栃木県は、東日本大震災と福島原子力発電所の事故のため大混乱でしたが、札幌まで来るとそのようなことが嘘のように日常の生活が営まれていたことに驚きました。

私は、青年期の臨床心理学（特にひきこもり青年の支援）と児童養護施設の子どもの心理的援助を専門にしてきました。この度は、長い学生生活を過ごした札幌に望んで戻ってきたのですが、栃木県にいる教え子たちやひきこもりの若者たちが、震災の後どのように過ごしているのか気がかりで仕方がありませんでした。

震災からそろそろ1年がたち、まだまだ不安定な状態ではありますが、若者たちは自分なりの一歩を踏み出し始めたようで、すこし胸をなでおろしています。私もこの一年で、新たなスタッフのみなさまと若者たちとの出会いに恵まれました。学部の先生方からは様々な刺激をいただき、学生さんたちからは活力をいただきました。気がつけば、再び北の大地に根を下ろしつつあるようです。



講師 松浦 啓子
(臨床心理学科)

2011年4月から人文学部臨床心理学科にて「精神保健福祉援助実習・演習」「精神保健福祉論」など、主に精神保健福祉士の養成にかかわる科目を担当しています。以前は精神保健福祉の現場でソーシャルワーカーとして仕事をしていたのですが、実習生との出会いを通して、専門職（精神保健福祉士）を育てることに意義を感じ、7年前からは教育機関での養成に携わってきました。

精神保健福祉士がかかわりの対象とするのは主に精神障がい者といわれる方たちであり、その社会的復権や権利擁護等を常に意識しつつ、さまざまな支援を行っていきます。また、昨今の社会状況とも関連して、その活動領域は精神科の医療機関や障害者自立支援法関連の事業所だけでなく、学校・企業・司法へと広がりがつづいています。学生たちは実習や講義を通して、このような現実の一端に触れ、さまざまなことを感じ、気づき、考えることになりましたが、専門職としてのスタートラインに立てるよう、微力ながらかかわってきたいと考えております。今後とも、よろしくお願いたします。



教授 畠山なよ子
(こども発達学科)

音楽を中心に担当しています。3月までは、小学校教育に携わっていました。ですから、目の前にいる学生が数年後に小学生の前に立っている姿を思い浮かべながら講義をしています。

4月このかた強く感じているのは、本学が学生たちに優しく親切なことです。学科会議でも、学生の様子など、情報を交流し共有して対応しています。

一番感動したのが、「教育実習事後交流会」。教育実習で学んできたことを代表者が発表し、意見交流する場です。事前に指導案の書き方や模擬授業などの準備をして、課題をもって実習に参加した成果が伝わってきます。そして4年生の真剣な姿そのものが、下学年の具体的な目標となっているようです。

12月に開いた小さなコンサート（発表会）では、先生方や上学年の学生が温かく盛り上げてくれました。

このように「学びと成長を支援する学校」であることを日々実感しています。音楽をとおして、微力ながらその一端を担っていくことができれば幸いです。

留研報告

黒瀬川の流れに

私は、2010年4月から2011年3月まで、1年間、大学の研究休暇を利用して愛媛県西予市城川町に滞在しました。西予市を中心市に四国の地質調査をし、その成果を市民に広げる科学教育の実践を研究テーマとして、1年間過ごすことにしました。

そもそもなぜ西予市城川町かというと、ここには黒瀬川構造帯とよばれる地質学的に特異で重要な地質体が分布しているからです。黒瀬川とは、古い村の名称で、今の名を残している川に由来しています。黒瀬川構造帯は、地質学では古生代の大陸地殻の断片を含んでいることで世界的に有名なのですが、社会的にはあまり知られていません。

20年ほど前、この地に博物館が建設される時に協力して以来、毎年のように通っていました。あるときは野外調査で、あるときは科学教育で、またあるときはデータベース作成にと、時々研究テーマは変わっていましたが、何らかのきっかけをつくっては、この地に通いました。四国山地の裾野の山村で限界集落を抱えるようなところですが、私の第2の故郷ともいえる

ほど、馴染みのある地となっています。

1年間の滞在で、地質学でも科学教育でもいろいろと成果がありました。予想外の成果として、私の滞在を機に、西予市がジオパークを目指すことになったことです。市役所の人々の基礎知識のために、市役所で講演会もしました。今後もジオパークを目指して協力することになったので、これからも西予市とは付き合いが続きそうです。

私には、城川町の自然、風景、人など、今の日本、日本人が忘れていようなナニカがあるような気がします。そのナニカが私を黒瀬川に誘うのかもしれない。
(こども発達学科 小出 良幸)



西予市役所での講演会



西予市立土居小学校での授業



黒瀬川のホタルの乱舞

留研報告

ルーン川のほとりで

2010年4月1日から1年間、英国イングランド北西部にあるランカスター大学で客員研究員として在外研究をさせて頂きました。貴重な機会を与えて下さった奥谷学長と小林人文学部長、快く送り出して下さった教職員の皆様には心より感謝申し上げます。

ランカスターはランカシャー州最北にあり、モアカム、ヘイシャムなどの町を含めた行政都市としての人口は約130,000人。ランカスター自体は50,000人足らずの田舎町です。古代ローマ帝国の要塞跡に建てられたランカスター城が中心にそびえ、町をルーン川が横切ります。海運業盛んなりし頃この川を商船が行き来し、この町の産業を支えたとか。

私はこの町の中心街にほど近い、ルーン川のほとりにフラットを借りました。隣には The Three Mariners というパブ (パブが隣だからこのフラットを選んだのではなく、フラットの隣にたまたまこのパブが!?)。ランカスター大学へは、バスで、住宅街を抜け、20分。大学の周りは完全に田園風景で、羊や牛が草を食み、ウサギやリスがちよろちよろ。学生の多くが寮生活を

し、勉強に集中できる環境で、学期中の図書館の盛況ぶりには驚きました。

1964年創立のランカスター大学は、約12,000人の学生に対し、教員は700人ほど。私がお世話になった言語学英語学科は、教員30名以上に職員6名という充実ぶり! 先生方の研究内容も、英語学の諸分野から認知言語学、社会言語学、コーパス言語学、言語人類学、言語テスト、第二言語習得、英語教授法など多岐に。お忙しい中ヴィレム・ホルマン先生には本当にお世話になりました。

慣れない生活面では、ゆったりとした美しい自然のもと、おっとりとした優しい地元の人たちによく助けられました。大学からは様々な刺激をもらいながら、ずっと時間をかけて読みたいと思っていた意味論の文献や論文をひたすら読みあさる日々。この貴重な1年の勉強や着想を今後研究論文にまとめ、様々な体験を教育に生かしていければと思っています。

(英語英米文学科 山添 秀剛)



ランカスター大学の校舎

編集後記

編集にたずさわって、学部報の配布先を詳しく知りました。大雑把ですが、学内向け(学生・教職員・非常勤講師・図書館等)で約、残りが高校・高校生などへの学外向けのような感じです。高校生向けには学科の内容を詳しく説明した「学科パンフレット」もありますので、4月以降は配布先と内容の検討を始めてより効果的な本誌の利用を追求したいと考えております。(鶴丸)